

## 継続する第二波フェミニズム理論 —リベラリズムとの対抗へ

岡野 八代

### はじめに ラディカリズムの復活？

2013年、アメリカ合衆国（以下、アメリカ）のフェミニズム政治理論を牽引してきた哲学者、ナンシー・フレイザーは、自身の研究を振り返る論文集『フェミニズムの運命』を公刊した<sup>1</sup>。80年代には、フランクフルト学派の影響を受けつつ、ハーバーマス著『公共性の構造転換』（1962）にいち早くフェミニズムの立場から批判を加えたフレイザーは<sup>2</sup>、第二波フェミニズム運動から生まれたフェミニズム理論の歴史を三幕の舞台に喩えている。

第一幕は、60年代後半に始まる新左翼運動の潮流のなかから生まれた女性解放運動<sup>ウーマンリブ</sup>が、戦後の資本主義社会における男性支配に対抗する形で幕を開ける。第一波フェミニズム運動によって形式的な政治的平等を手に入れた後に戦後を迎えた女性たちは、同時代の新左翼運動と併走しながら、ジェンダー不平等を隠ぺいし、政治を専門化する傾向にあった、社会民主主義（＝福祉国家）の理想像を暴いていく。〈個人的なことは政治的である〉という周知のスローガンは、資本主義の根深い男性中心主義<sup>ラディカリ</sup>を看破し、根源から枝葉まで社会を変革すること

1 Nancy Fraser, *Fortunes of Feminism: From State-Managed Capitalism to Neoliberal Crisis* (London: Verso, 2013).

2 Nancy Fraser, "Rethinking the Public Sphere: A Contribution to Critique of Actually Existing Democracy," in *Habermas and the Public Sphere*, ed. Calhoun Craig (Cambridge: MIT Press, 1992). 山本啓・新田滋訳『ハーバーマスと公共圏』（未来社、1999年）。近代の伝統的な思想潮流に対峙するアメリカのフェミニズム理論は、マルクス主義と対決した20世紀の思想家に大きな影響を受けている。その意味でもまた、第二波フェミニズム運動から生まれたフェミニズム理論の興隆は、マルクス主義との批判的な対話のなかから生まれてきたとまとめることができる。そうした流れの代表作が第2節で詳しく論じる、フレイザーと共に80年代以降のアメリカのフェミニズム理論の興隆を支えたドゥルシラ・コーネル、セイラ・ベンハビブ、アイリス・マリオン・ヤング、ジュディス・パトラーらが寄稿している論文集である。 Benhabib, Seyla and Cornell, Drucilla, eds., "Introduction: Beyond the Politics of Gender," in *Feminism as Critique: On the Politics of Gender* (Minneapolis: University of Minnesota Press, 1987).

を目指していた。こうした動きこそが、世界的な広がりをもった第二波フェミニズム運動である。

しかし、70年代に芽吹いたラディカルな政治は、やがて、80年代、レーガン政権に象徴されるバックラッシュと保守化のなかで、次第にそのユートピア的な解放志向が殺がれていく。そして、フェミニズム理論の争点は、「再配分から承認へ」と移行していき、アイデンティティや差異を強調するフェミニズムが登場したとし、フレイザーはこれを第二幕と診断する。

しかしながら、「それ以前の世代が、政治経済の作り直しを目指していたの」と対照的に、この世代は、文化の変革により焦点を当てた<sup>3</sup>ため、台頭するネオ・リベラリズムの勢力による社会的平等という理念への攻撃に立ち向かうことができなかった。ネオ・リベラリズムによって惹起される現代の危機を前に、「文化主義への還元は広く信用を失い、急速に政治経済へのフェミニストの関心が蘇ってきている」<sup>4</sup>。これがフレイザーのいう、第三幕であり現在のフェミニズム理論の姿である。

フレイザーは自身の研究を振り返るなかで、アメリカにおける歴史的なフェミニズム理論の展開を提示しているために、当然のことながら、自身の研究に引きつけた解釈が提示されるのはやむを得ない。とりわけ、彼女が80年代から90年代にかけての特徴としてみている「承認の政治」の興隆は、彼女自身が、「再配分か承認か」といった、あたかも二者択一であるかのような枠組を設定してしまったために、再配分パラダイムを批判する者たちは、固定的なアイデンティティの政治、つまり文化を中心とする政治を支持しているように見せかけられてしまった<sup>5</sup>。

3 Fraser, *Fortunes of Feminism*, 4. 強調は引用者。なお、以後本稿における英語文献からの引用は、筆者の翻訳による。邦訳頁が記されている場合も、参考するにとどめ、筆者の翻訳である。

4 Ibid., 12.

5 フレイザーが引き起こした論争について論じることは、本稿の目的ではない。「再配分か承認か」といった問題提起に対する批判については、かつて以下で論じた。岡野八代「〈分配〉か〈承認〉かの手前で—ケアの倫理からの再考」越智博美・河野真太郎編『「ジェンダーにおける「承認」と「再配分」』(溪流社、2015年)。またフレイザーのいう「承認の政治」理解が、いかにチャールズ・テイラーやアクセル・ホネットといった現代のヘーゲル主義者たちのそれと齟齬をきたしているかについては、以下を参照。岡野八代『「承認の政治」に賭けられているもの—解放か権利の平等か』『法社会学』64号(2006年)。また、バトラーとフレイザーの論争については、加藤泰史が詳しく論じている。加藤がいうように、「『再配分』と『承認』というカテゴリーの対比は、『中断された正義』の第一部第一章『再配分から承認へ?』の中でフレイザーによって初めて導入されたと言ってもよい」[加藤泰史「フレイザーとバトラーの『再配分/承認』論争」越智・河野編、46頁]。筆者の立場は、加藤が指摘するヤングらの立場に近い。すなわち、『「ジレンマ」に陥るとする現状診断は、フレイザーの抽象的な枠組みによる理論的な構築物にすぎず、その意味で『再配分/承認』の二元論的枠組みは現実を的確に捉えてはいない」[ibid., 51]。

本稿では、第二波から生まれたフェミニズム理論の第二幕について論じられる。すなわち、フレイザーによれば、ネオ・リベラリズムによって政治の領域が経済合理性によって侵食され始める一方で、フェミニズムを含めた多くの知的営為はむしろ、かつての搾取といった階級的な抑圧原理ではなく、文化的な誤認の告発に向かったとされる時代に焦点を当てて、彼女とは異なり、第二幕において、むしろフェミニズム理論はその議論を深め、洗練され、リベラルな資本主義社会における抑圧の根源をしっかりと見定めたのだと主張したい。

この時期のフェミニズム理論を振り返ることで、第二波フェミニズム運動から生まれたフェミニズム理論が、女性たちの経験や身体、それまで男性たちが見向きもしなかった家族という領域における営みに、新しい知見と価値を見いだしながら、新たな社会を構想しうる理論を構築してきた経緯がより鮮明となるだろう。

以下本論では、次のように論じていく。まず、フレイザーの解釈が示すように、第二波が生んだフェミニズム理論に当初から潜在していた実践的かつ理論的な可能性について、未だ多くの誤解が存在し、その全体像が明らかになっていないことが明らかにされる（第一節）。その後、本来第二波フェミニズムが何と闘ったのかが分節化され、その闘いの力は弱まるどころか、80年代から90年代にかけてフェミニズム理論が深化を経たからこそ（第二節）、彼女たちの闘いは現代の要請に応えるものとなっていることが示される（むすび）。

したがって、本稿の目的は、第一に、フレイザーが否定的に捉える80年代から90年代にかけてのフェミニズム理論を、マルクス主義との対決といった第二波フェミニズムの源流に遡りつつ、どのような点でマルクス主義を批判したのかその争点を分節化し（第一節）、現在筆者がフェミニズム理論と実践の要と考えるケアの倫理<sup>6</sup>へといかに導かれていくのかを明らかにすることである（第二節）。以上の目的を果たすために、本論では、81年刊行の『マルクス主義とフェミニズムの不幸な結婚』と、87年刊行の『批評としてのフェミニズム』という二冊の論文集を導きの糸とする。

さらに本稿は、以上の思想史上の課題に加え、日本社会におけるフェミニズムの理論構想と実践にも少なからず貢献することを目的としている。なぜならば、第二波から出発したアメリカのフェミニズム理論が一貫してなにと闘っているのかを理解することによって、グローバルに展開するネオ・リベラリズムとネオ・コンサヴァティズムの潮流のなかに巻き込まれた日本社会の分析と、社会変革に向けた実践に一つの指針が得られると信じるからである。

6 筆者の考えるケアの倫理の現代的な重要性については、岡野八代『フェミニズムの政治学—ケアの倫理から、グローバル社会へ』（みすず書房、2012年）を見よ。

本稿は、第二波フェミニズム運動から生まれた理論が萌芽的であれ示していた可能性の在り処を、現時点でのフェミニズム理論の到達点から逆照射する試みである。

## I 第二波フェミニズム理論におけるマルクス批判から、ケア労働の発見へ

### 1. ウーマン・リブからの出発

アメリカにおける第二波フェミニズム運動は、学生を中心とするラディカル・フェミニストたちと、全米女性機構 NOW へと結実していく主流社会でのプレゼンスを高めようとするリベラル・フェミニストたちの分裂を経験しながら、先述したように運動としては70年代後半には終息していく。ここで、簡単にではあるが、アメリカのラディカル・フェミニズムとリベラル・フェミニズムとは、運動体としていかなる主張をしたのかを振り返り、本稿で注目するマルクス主義と対峙し、その欠陥を乗り越えようとする社会主義フェミニズム理論との関係を明らかにしておこう。

まず注意しておかなければならないのは、60年代に登場するウーマン・リブ運動において、後に理論的な開花をみせる社会主義フェミニズムやマルクス主義フェミニズムは前面に登場してこないということだ。むしろ、運動としては、NOWの創始者であるベティ・フリーダンに代表されるリベラル・フェミニストたちとラディカル・フェミニストたちが、拮抗する形で運動を繰り広げる。リベラル・フェミニストたちは、〈現存する構造に対する十全な参加の妨げになるような差異は存在しない〉といった意味での平等、つまり同じであることによる「平等」を求め、したがって彼女たちの運動は、雇用を中心とする法改正を求めていくことを中心に展開された。1966年に設立されたNOWは、次のようにその目的を掲げていた。「女性たちをアメリカ社会の本流への十分な参加に導き、あらゆる権利と責任を行使しながら、男性との完全に平等な協力関係を打ち立てるのに必要な行動を起こすこと」、と<sup>7</sup>。

ジュディス・エヴァンスによれば、こうしたリベラルな主張とは、「両性具有」と「ジェンダー・ブラインドな平等」、つまり、同じであることによる平等 equality as sameness を特徴としている<sup>8</sup>。両性具有とは、男性と女性が全く同じではないとしても、社会の諸機構に参加する個人としては、男性も女性も異なら

7 <http://now.org/about/history/statement-of-purpose/>. [2016年9月18日最終閲覧]

8 Evans, Judith, *Feminist Theory Today: An Introduction to Second-Wave Feminism* (London: Sage Publications, 1995), chap. 3.

ないといった主張であり、だからこそ、彼女たちの求める平等もまた、既存の社会のなかで同じ条件で競争できることといった〈機会の平等〉である。したがって、エヴァンスは、「彼女たちは、不平等な社会を支持しており、単純に、その社会の諸階層内部で上位に進みたいのだ」と厳しく評価する<sup>9</sup>。

こうした平等観に対して、たとえば、婚姻制度を奴隷制度として批判したり、共同育児を提案したり、階級闘争や売春問題にも取り組んだラディカル・フェミニストたちは、むしろ既存の社会構造の変革を唱えた。たとえば、売春問題に取り組んだティ＝グレースは、68年にNOWを脱退するが、そのさい次のように述べたと記録されている。「大部分の女性がフェミニズム哲学を拒むのは、怖いからです。もし結婚と男を拒めば——つまり南部の奴隷が奴隷制を拒んだのと同じやり方で拒めば——依然として結婚制度を是認している人々から敵視されるのを恐れていたのです」<sup>10</sup>。

彼女たちは、新左翼運動からも影響を受けつつ、あらゆる種類の抑圧に抵抗した。ただ、男性の活動家たちが注目することのなかった、あるいは意識的に運動の争点からは排除してきたセクシュアリティと身体こそが女性の抑圧の原因だと考え、男性と女性の「差異」に大きな意味を見いだそうとする。したがって、リベラル・フェミニストたちの「平等」とは異なり——「同じであること」によって平等を手に入れようとする彼女たちにとって、「差異」の強調は平等を否定しかねない危険なものであった——、再度エヴァンスを引用すれば、彼女たちの主張は次のような平等を求めるものであった。「それは、かつて社会主義的な目標と精神として考えられていた条件の平等といえる。したがって、すべての者が同じだけ所有するか、まったく同様に扱われるか、あるいは、必要に応じた財の配分のためのなんらかの形式が存在することである」<sup>11</sup>。「必要に応じた財の配分」という言葉に明らかなように<sup>12</sup>、その平等観には明らかにマルクス主義の影響がみられる。

しかし、彼女たちにとって、女性たちが直面する抑圧の原因を探ることが、理想の平等が実現した社会を構想する以上に先決問題であった。その原因は、「家

9 Ibid., 30.

10 マルシア・コーエン、森泉・宮内訳『世界を変えた女性たち—現代アメリカ・フェミニズム史』（誠信書房、1996年）、164頁。

11 Evans, *Feminist Theory Today*, 62.

12 同等の権利の主張は、「不平等な労働に対する不平等な権利」であり、「公正な分配」は、生産条件の不平等の帰結であるのだから、そのような主張はなおブルジョア的だとして、高度に発展した共産主義社会においては、「各人はその能力に応じて、各人にはその必要に応じて」が、社会の基本原則となるとマルクスは考えた。カール・マルクス「ゴータ綱領批判」辰巳伸知ほか訳『マルクス・コレクション VI』（筑摩書房、2005年）、86頁。



父長制であり、資本制であり、当時呼ばれていたように「システム」である」<sup>13</sup>。こうして、男性とは異なる形で社会構造によって強く歪められた女性性を強要されている女性の現状を分析する彼女たちは、徐々にその原因を家父長制に求めていくようになる。

## 2. 社会主義フェミニズムの意義—マルクス主義との対決

60年代新左翼運動を始めとして、さまざまな解放運動と連動しながら興隆してきたウーマン・リブ運動のなかで、ラディカル・フェミニストたちはマルクス主義の影響を受けつつも、男性中心のマルクス主義の理論と実践に対して距離をとりはじめた。というのも、ジェンダーやセクシュアリティの強調は、左翼運動のなかに分裂を起こすといった理由で、彼女たちの関心は二の次とされ、それどころか、彼女たちの要求はたびたび、嘲笑やあからさまな差別の的になった<sup>14</sup>。そうした男性中心の状況のなかで、むしろ独自の理論を作り上げる必要性を感じ、彼女たちの関心が家父長制やセクシュアリティに向いていったのは、当然の流れだったといえよう<sup>15</sup>。

しかしここに、後の評価のあり方に関わる、躓きの理由が垣間みえる。ラディカル・フェミニストたちの理論や実践のなかで、男性との差異を強調するといった点のみが焦点化され、本来彼女たちが目指していたあらゆる抑圧からの解放といった主張が、後景化されたようにみえるからだ。つまり、フレイザーが第二波フェミニズム以降の理論的展開の第二幕を「文化的」と表現するように、政治経済の問題から、ラディカル・フェミニストたちは、アイデンティティやセクシュアリティ、そして問題の所在を家族内の役割分業にみるといった、文化の問題へと関心を変化させたと解釈されるようになる。

上野千鶴子も注記しているように、女性の抑圧の原因を階級支配にみる社会主義婦人解放論と、それに対抗する形で登場するラディカル・フェミニズムとの「統

13 Evans, *Feminist Theory Today*, 64.

14 Lydia Sargent, ed., *Women and Revolution: A Discussion of the Unhappy Marriage of Marxism and Feminism* (Boston: South End Press, 1981), xii- xviii. 田中かず子訳『マルクス主義とフェミニズムの不幸な結婚』（勁草書房、1991年）、3-11頁。

15 当時の理論状況については、イギリスとアメリカにおけるマルクス主義フェミニズムをいち早く紹介した、上野千鶴子「訳者解説」[クーン、アネット・ウォルフ、アンマリー、上野千鶴子ほか訳『マルクス主義フェミニズムの挑戦』（勁草書房、1981年）]に詳しい。上野の有名な定義によれば、女性解放理論には、社会主義婦人解放論、ラディカル・フェミニズム、マルクス主義フェミニズムの三つしかない。また、70年代に社会主義婦人解放論に失望したラディカル・フェミニストたちが、家父長制という概念を導入した理論的実践的理由を説明したうえで上野は、「ラディカルフェミニズムの初期の担い手たちが、スチューデントパワー世代の、いわば失望した女性マルクス主義者たちだったことを付け加えておきたい」と注記している。上野「訳者解説」、250頁。

合もしくは止揚として登場した」フェミニズムは、「フェミニスト・マルクス主義者でも女マルクス主義者でもない」。それは、「フェミニズムの視点からのマルクス主義の読みかえである」<sup>16</sup>。

上野が共訳する『マルクス主義フェミニズムの挑戦』が、イギリスで1978年に公刊される一方で、アメリカではリンダ・サージェントの編集で、『マルクス主義とフェミニズムの不幸な結婚』（以下、『不幸な結婚』）が1981年に公刊される。編者のサージェントもまた、「男が革命を起こし、若い娘をものにするのだ」といった、新左翼運動のなかでの男性たちの女性に対する日常的な態度こそが、本書を変遷する動機となったと論じている<sup>17</sup>。そして、新左翼内での女性差別的な言動に対して、理論的に対抗するためにも、彼女たちは「労働と経済関係を最も重大な（時には、唯一の）分野としてとらえるマルクス主義用語の狭隘さと対決するようなやり方で、女性に特有の抑圧を理解するにはどうしたらよいだろうか」という課題に取り組むことになる<sup>18</sup>。そして、彼女たちが自らの経験を通じてみだしていった研究対象とは、マルクス主義の批判的再読のなかで発見していく再生産労働や性にに基づく分業、その中心的な領域としての家族、そして家族における営みを通じたアイデンティティ形成やセクシュアリティ、そして身体であった。

なお、アメリカの文脈では、上野がマルクス主義と呼ぶフェミニズムは、社会主義フェミニズムに当てはまる。ここでは名称には拘らず、アメリカのフェミニズム理論がマルクス主義との対決のなかから生まれてきた、という原点を指摘するに留めておく。むしろ、本論の以下では、ハイジ・ハートマンのリード・エッセイに始まる論文集『不幸な結婚』——原題は、『女性と革命』——の再読を通じて、80年代に理論的に開花していくフェミニズム理論の争点の所在を再確認してみたい。ただ、本稿では紙幅の関係で、精神分析派のフェミニズム理論については言及しない。むしろ、文化的という解釈に反駁することを目的に、アメリカ社会を根本で支えるリベラリズム批判へと理論が収斂していくという仮説の下で、80年代のフェミニズム理論の軌跡を読み解いていく。

『不幸な結婚』に収められた論考のうち、とくに注目するのは、後にフェミニスト経済学者として、社会における子ども（子育て）の価値を経済学的に論及し、独自の批判的社会理論を展開するナンシー・フォルブルと<sup>19</sup>、第二波以降のフェミ

16 上野千鶴子『家父長制と資本制—マルクス主義フェミニズムの地平』（岩波文庫、2009年〔初版1990年〕）、13頁。強調は原文。

17 Sargent, *Women and Revolution*, xiii. 邦訳、3頁。

18 Ibid., xx. 邦訳、14頁。

19 Nancy Folbre, *The Invisible Heart: Economics and Family Values* (New York: The New Press, 2001).

ニズム理論の諸議論を統合し、女性の抑圧の根源を明らかにしたフェミニスト哲学者アン・ファーガソン<sup>20</sup>の共著論文「家父長制と資本制の不幸な結婚」である。当論文からしっかりと見極められるべきは、彼女たちが導入する「性＝情愛生産 sex-affective production」<sup>21</sup>という概念によって展開される様々な論点がいかに、エヴァンスやフレイザーが「文化的」と評する80年代から90年代のアメリカにおけるフェミニズム理論の結節点となっているかである。

### 3. 再生産労働から、ケア労働へ

すでに、日本でも上野を始めとして多くの論者によって、社会——上野によれば、マルクス——主義フェミニズムについては論じられている<sup>22</sup>。だが、フォルブルらの議論を再読する前提として、簡単にではあるが、70年代に専門分野の異なるフェミニストたちが参加した論争の端緒に触れておこう。『不幸な結婚』におけるほとんどの論考が参照するのが、エンゲルスの『家族・私有財産・国家の起源』なのだが、とりわけ以下の一節は、彼女たちの議論を喚起した一説として、幾度も参照されることになる。

唯物論的な見解によれば、歴史における窮極の規定的要因は、直接的生命の生産と再生産である。しかし、これ自体はまた二種類のものからなる。一方では生活資料の生産、すなわち衣食住の諸対象とそれに必要な道具の生産、他方では人間そのものの生産すなわち種の繁殖が、これである<sup>23</sup>。

同時代のイギリスとアメリカにおけるフェミニストたちが、マルクス主義の批

20 Ann Ferguson, *Blood at the Root: Motherhood, Sexuality and Male Dominance* (New York: Pandora Press, 1989).

21 この概念について、後にファーガソンは次のように説明している。「歴史的にさまざまな方法で、セクシュアリティと愛情に結びついた人間の欲望は、組成され、形成され、影響を与えられ、その結果、子育てや社会的な絆へとつながっていく。こうしたシステムを通じて、一部であれ、様々な男性支配とその他の社会的支配形態が再生産される。ここではそのシステムを、性＝情愛生産システムと呼ぶ。このシステムは、ドゥルーズとガタリは「欲望する生産」、ゲイル・ルービン「性／ジェンダー・システム」と名づけてきたが、ファーガソンは、経済活動とセクシュアリティとの関連をより強く示すために、あえて新しい用語を使用するとしている。Ibid., 77-78.

22 日本における家父長制をめぐる議論を整理しながら、英米の第二波以降のフェミニズム理論を網羅的に解説したものとして、衛藤幹子「家父長制とジェンダー分業システムの起源と展開レジーム」『法学志林』103巻2号（2005年）を参照。

23 Heidi Hartmann, "The Unhappy Marriage of Marxism and Feminism: Toward a More Progressive Union," in Sargent, *Women and Revolution*, 11. 邦訳43頁；クーン『マルクス主義フェミニズムの挑戦』、8頁。



判的展開に着手する契機となるのは、エンゲルス『家族・私有財産・国家の起源』序文にあるように、マルクス主義が採る史的唯物論が「発見した」再生産という概念の理解をめぐる論争であったとあってよい。

また、マルクス主義に、新左翼運動だけでなくフェミニストたちも傾倒したのは、マルクス主義が、資本主義社会における抑圧の解明と解放の「唯一の」理論的支柱であったことを考えると、必然であったといっても過言ではない<sup>24</sup>。

たとえば、先に触れたハートマンは、「マルクス主義とフェミニズムの不幸な結婚」（以下、「不幸な結婚」）において、合衆国のラディカル・フェミニズムを牽引したシュラミス・ファイアーストンの重要性を、女性による種の再生産こそが、家父長制の物質的基盤であることを主張した点にみている。伝統的なマルクス主義者によれば、労働市場における生産こそが社会の物質的基盤であり、家族領域における「出産、セクシュアリティ、育児を体系づける家父長制は」イデオロギーであり、内在する物質的基盤をもたない<sup>25</sup>。男性による女性支配があらゆる抑圧の基礎であると考えたファイアーストンの家父長制理解の画期を評価しつつ<sup>26</sup>、ハートマンは、家父長制の物質的基盤を、出産や育児だけでなく、男性による女性の労働力の支配だと指摘する。こうして、マルクス主義においては、主観の領域であると考えられてきた女性に対する男性の支配は、資本制社会という時代制約の下で、特有の物質的基盤をもつ家父長制として理解されるようになった。

それでは、こうしたハートマンの議論に対しフォルブルとファーガソンが提示した「性＝情愛生産」は、現代のわたしたちになにを示唆するのだろうか。

第一にフォルブルらは、ハートマンが「資本制社会には家父長制と資本の間に健全で強力なパートナーシップが存在する」と主張するのに対して<sup>27</sup>、「資本制と家父長制の結婚は抗争状態にある」という<sup>28</sup>。たしかに両者は相互に依存関係にあるが、彼女たちは、それぞれの制度を維持するために必要なものが矛盾するために、その絆は弱まっていると考えている。このことを見極められないのは、「出産、育児、そして身の回りの世話 nurturance とか情愛および性的満足の供給」とし

24 上野「訳者解説」、246 頁；古田睦美「マルクス主義フェミニズム—史的唯物論を再構築するフェミニズム」江原由美子・金井淑子編『フェミニズム』（新曜社、1997 年）、318 頁。

25 Hartmann, “The Unhappy Marriage of Marxism and Feminism,” 12. 邦訳、44 頁。

26 ラディカル・フェミニズムの登場以前における家父長制理解は、「歴史的な家父長制社会や現代の西欧資本制社会を、女性支配の権限を男性に与えるという特質を持つ、男性間の諸関係のシステムというふうに理解してはいない」。Ibid., 14. 邦訳、48 頁。

27 Ibid., 19. 邦訳、54 頁。

28 Ferguson and Folbre, “The Unhappy Marriage of Patriarchy and Capitalism,” in Sargent, *Women and Revolution*, 314. 邦訳、234 頁。

ての「性＝情愛生産」の社会的機能を<sup>29</sup>、ハートマンが認識できていないからである。では、「性＝情愛生産」に注目することによって、なにが明らかになるのだろうか。以下4点を指摘したい。

第一に、人間や社会の再生産として捉えられがち——したがって、マルクスのには、生物学的過程や世代の再生産として理解されてしまう——な、子どもを産み育てることや、情愛や養育 *nurturance* や性的満足を与えることを、むしろ生産過程の一つと考えるべきだと提唱する。そのように捉えることで、モノを生産する労働よりも、子育てといった営みには社会的価値がないといった思い込みが払拭されるからである。

第二に、生産過程とみなすことによって、あたかも生物学的な定義のように考えられてきた母親業が、社会的定義に転換される。「女性は「理想的母親」としての個性をもつように社会化され、このことにより、思いやり *nurturance* や性的満足において、男性から受け取る以上に与える女性が作られてきた」<sup>30</sup>。

第三に、マルクス主義が家庭生活を経済的ではないと特徴づけ、心理や文化的カテゴリーとして理解し、新フロイト学派に影響を受けたフェミニスト（＝ラディカル・フェミニスト）たちが、子どものアイデンティティに母親業がいかに影響するのかにもっぱら関心を示すのに対して<sup>31</sup>、フォルブルらは、母親業という労働過程そのものが、それを担う女性に与える影響を争点とした。

最後に、後のフェミニズム理論の深化にとって注目すべきは、資本主義の発達——女性も市場労働に駆りだされること——によっても、家父長制——個々の男性のために、女性が家庭内労働を提供させられる制度——は依然として維持されると論じたハートマンへの反論である。ハートマンは、当時の洗濯状況について、外部化により洗濯は集中化できるにもかかわらず、各家庭でそれぞれ洗濯をする

29 Ibid., 317. 邦訳、238頁。

30 Ibid., 319. 邦訳、240頁。

31 たとえば、Nancy Chodorow, *The Reproduction of Mothering* (New Haven: Yale University Press, 1978). 大塚光子・大内菅子訳『母親業の再生産—性差別の心理・社会的基盤』（新曜社、1981年）；Jane Flax, “The Conflict between Nurturance and Autonomy in Mother-Daughter Relationships within Feminism,” *Feminist Studies* 4, no. 2 (June 1978) を参照。フラックスは、家父長制における母娘関係のなかで形成される女兒の心理的特徴として、「自律 *autonomy* と思い遣り *nurturance*」という相反する心理を挙げる。フラックスによれば、*nurturance* はつぎのように定義される。「思い遣り *nurturance* によって、わたしが意味するのは、愛情の表現であり、それを受け取るひとの安寧に対する深い配慮が込められている。しかも、受け取るひとが、思い遣るひとのニーズを充たしたり、その思い遣りに値する人物だと明らかにすることを求めもしない」。Ibid., 187 [note 4]。なお、当時ジェンダー概念の発見によって、女性は *nature* 自然ではなく、養育 *nurture* によるものといった議論が盛んであったため、*nurture* という概念が多用されるが、ギリガンの『もうひとつの声』公刊以降、ケア概念へと統合されていく。

傾向に着目し、家父長制は存続すると予測した。しかし、この予測は、育児その他の世話や性＝情愛生産と家事労働とを区別していないために生じた過ちだとフォルブルらは反駁する。つまり、彼女たちは、家父長制は、資本制の展開のなかで弱体化していくと予測するのである。そしてその矛盾が噴出するのは、単純作業の繰り返しである、いわゆる家事労働ではなく、性＝情愛生産や世話といった、責任や思考力を伴うケア労働においてである。

家庭で洗濯機をまわし衣服を洗うにしても、母親の役割を果たすことにはほとんど支障をきたさない。ほんの二、三分のことだし、指定の時間までに終わらせなければならないわけではないし、思考力 *thought* や注意力 *attention* もほとんど必要としない。もし、女性が家庭にとどまるのは、なによりも幼児の世話 *care* をするという割り当てられた責任のためであると仮定すれば、家事のある分野で技術的進歩がないことが、それほど「非効率」とはならないのではないか<sup>32</sup>。

## II 第二波フェミニズム理論の深化—リベラリズムとの対抗

### 1. 生産パラダイムからの脱却

「不幸な結婚」の初稿が1975年に公表されたことに現れているように、第二波フェミニズム運動から生まれた理論は、むしろ運動の波が静まると同時に、マグマのように湧き上がってきた。それは、男性中心の左翼運動への批判であると同時に、男性中心の主流の思想・理論に対する大いなる異議申し立てであった。運動としては、70年代に女性解放の一つの時代が終わるのだが、他方で、その具体的経験から生まれた独自のフェミニズム理論が登場してくるのである。

では、先にみたフォルブルらの論考の画期は、その後どのように展開されていくのだろうか。フォルブルらの論考には、現在からみれば、概念や用語に不正確さや時代的制約が散見される。だが、注目されるべきなのは、彼女たちの論点がいかに、80年代以降の社会主義フェミニストたちに継承され、その思想が深化すると同時に、理論的な射程を拡げていくのかである。では、前節で指摘した四点がどのように展開されていくのかを、80年代以降活躍する哲学者ドゥルシラ・コーネルと政治思想家セイラ・ベンハビブが編集した、『批評としてのフェミニズム』

32 Ferguson and Folbre, "The Unhappy Marriage of Patriarchy and Capitalism," 319. 邦訳、241頁。強調は引用者。

の論考から読み取ってみよう<sup>33</sup>。

まず、コーネルとベンハビブによれば、「20世紀のマルクス主義とフェミニズム思想との対決によって、他ならぬ前者のパラダイム転換が要請された。わたしたちは、この転換を、「生産パラダイムのからの脱却」と名づけることができる」<sup>34</sup>。

生産パラダイムとは、史的唯物論を方法論とする社会をめぐる知 science を科学たらしめているものであり、生産関係こそが社会変化やその展開を規定する最終的で決定的な要因だと考える理論的枠組みである。生産関係を明らかにすることで、歴史の客観的な知識を得、また、社会に生きる具体的成員の意識＝主観もまた、その社会の生産過程における位置づけによって決定される。したがって、社会変革を担うことが期待されている階級とは、生産過程における位置づけによって規定され、歴史上最も意味ある集団的行為者である。つまり、客観的とされる人類の歴史も、社会科学者の分析対象も、そして人びとの主観までもが、生産を中心に、そして生産によって決定づけられている。

したがって、確かにフォルブルたちも「生産」という用語を使用することによって、家庭内——つまり、市場の外であるために、通常は生産としてみなされない人間の営み——での、人の世話や子育てのために費やす思考や注意力、それだけでなく、「反復的なつまらない仕事」にみえる家事をも、「愛と心の支えを与えるという大きな仕事の一部」だと主張しようとしたのだ<sup>35</sup>。

さらに、「生産」概念に訴える彼女たちの主張は、それまで生産関係からは排除されていた女性たち、したがって、階級の外で社会変革を担う主体性も期待されていなかった女性たちが、どのような意識を社会的に形成されているのかに、わたしたちの注意を向ける。たとえば、やはり『不幸な結婚』において、ハートマンの家父長制（イデオロギーの心理学的構造＝上部構造）と生産関係（社会の物質的基盤＝下部構造）の二元論を批判したアイリス・M・ヤングは<sup>36</sup>、この後、『正義と差異の政治』（1990）を執筆するが、ヤングが差異に着目したのは、下部構造から上部構造へ争点を変更した、つまり主観的意識に着目する文化的な議論をするためではない。むしろ、労働者階級のみ社会変革の担い手を限定してきた生産中心主義からの脱却を示していると理解できる。

33 同書については、脚注1を見よ。

34 Seyla Benhabib and Drucilla Cornell, "Introduction: Beyond the Politics of Gender," in *Feminism as Critique: On the Politics of Gender*, ed. Benhabib and Cornell (Minneapolis: University of Minnesota Press, 1987), 1.

35 Ferguson and Folbre, "The Unhappy Marriage of Patriarchy and Capitalism," 320. 邦訳、241頁。

36 Iris M. Young, "Beyond the Unhappy Marriage: Critique of the Dual System," in Sargent, *Women and Revolution*.

だからこそ、「資本制と家父長制は、二つの静的な連動する相互補完的支配関係ではなく、ますます矛盾を深めてきている」——母親業においても、身の回りの世話 nurturance においても、セクシュアリティにおいても、期待される男性への従順さを身につけたとしても、女性たちはもはや安定した生活を保障されない——と考えるフォルブルらは、この矛盾を生きることによって女性こそが、社会変革の担い手となりうると論じたのだった。

マルクスは、労働者階級の生活を規定する特定の共通した社会関係が、資本制の個人主義的、競争的、利潤追求という要求に挑戦するような、根本的に新しい要求や集団的価値の発展に導くと主張する。[...] 女性は、世話をする人 nurturers である。わたしたちは世話をするにより、わたしたち自身が共に働く諸システム（家族、賃金労働のサービス職）を維持している。わたしたちのこの世話をする仕事の社会関係が、一方ではわたしたちの抑圧（男性や子どものために、自らの利益を犠牲にすること）の背景としてあり、他方ではラディカルな文化を生み出す者としての内に秘める力の背景となっている。すなわち、個人主義、競争、私利私欲に基づく倫理に対し真っ向から対立する、分かち合い、協力、集団的にかかわり合いの倫理 an ethic of sharing, cooperation, and collective involvement を、わたしたちは支持するのである<sup>37</sup>。

## 2. 家父長制批判から、リベラリズム批判へ

再生産労働概念の見直しを提示したフォルブルらは、それまでの〈なぜ、女性が母親業をするようになるのか〉という問いに応えるために、母娘関係における娘の成長過程に着目する精神分析派フェミニストたちの議論とは異なる争点を示唆した。それは、リベラリズムの核心にある「正義の倫理」とは異なる倫理、たとえば後にキャロル・ギリガンによって大きく議論が展開されるケアの倫理と強く共振していく<sup>38</sup>。

『不幸な結婚』に寄稿した科学思想家のハーディングも同様に、生産という概念には収まらない子育ての意味を強調する。家庭生活は単なる経済関係ではなく、その生産物もモノ（＝客体）ではなく、主体となっていく人間であり、経済関係

37 Ferguson and Folbre, "The Unhappy Marriage of Patriarchy and Capitalism," 329. 邦訳、251 頁。強調は引用者。

38 Carol Gilligan, *In a Different Voice: Psychological Theory and Women's Development* (Cambridge, MA: Harvard University Press, 1982). 岩男寿美子監訳『もうひとつの声—男女の道徳観のちがいと女性のアイデンティティ』（川島書店、1986 年）。



では捉えきれないからだ<sup>39</sup>。あたかも、家庭内の「労働」分業が、労働市場における社会関係の結果と考えられてしまうのは、マルクス主義者もまた、リベラリズムを無批判に受け継いだからだ<sup>40</sup>とハーディングは厳しく批判する。「公的問題と私的問題には、明白な区別があり、因果関係は常に前者が後者を決定するという仮説は、還元論的で性差別主義者であるマルクス主義が、無批判にリベラル思想から受け継いだ仮説である」<sup>40</sup>。

女性たちが歴史的に担わされてきた営みを、男性中心の基準で計る——さもないければ、無視する——といった社会科学に根強い傾向は、リベラルな公私二元論と切り離せない。

たとえば、19世紀に資本制が確立したさいの大きな社会的変動の一つは、家政 *oikos* として捉えられてきた経済が、「脱家族化」されたことである。歴史研究者であるリンダ・ニコルソンは『批評としてのフェミニズム』に寄稿した論考のなかで、つぎのように論じている。労働力と土地が国家的な制約から自由な商品となり、経済運動が市場の原理によって統制されるようになった19世紀の社会変動こそが、資本主義に独自の家族を形成したにもかかわらず、その時代を生きたマルクスは、資本制の「考察から、出産や子育てのような社会的に必要な活動力をめぐる、歴史的な軋轢を排除してしまう」<sup>41</sup>。

マルクス主義が食糧とモノの生産にかかわる活動のみを「生産」として捉え、その生産活動が行われる領域を経済とし、経済領域で剰余価値を巡って競合する集団のみを階級と考える一方で、家族はその下部構造に対応する結果にすぎない。「生産」活動が世帯から離れ、翻って、変化と力学に富む世界を構成するようになると、「再生産」活動は、人間生活のうちの野生的な、生理上の、そして非歴史的な側面としてみられるか、経済領域における変化の副産物として捉えられるようになる」<sup>42</sup>。

ハーディング同様、ニコルソンもまた、こうしたマルクス主義の傾向は、奇妙にも、リベラリズムの立場に限りなく近づいていると批判する。マルクス主義もリベラリズムも共に、経済の自律性を疑わないため、家族から分離していく生産活動が、いかに市場における生産活動以外の活動に依存し影響されているのか、その相互関係を問えないからだ。「実際のところ、「経済的」なものに自律性を見いだすマルクス主義は、リベラルな立場に近づいていく。というのも、リベラル

39 Sandra Harding, "What is the Real Material Base of Patriarchy and Capital?" in Sargent, *Women and Revolution*, 143-44. 邦訳、145-46 頁。

40 Ibid., 157. 邦訳、161 頁。強調は引用者。

41 Linda Nicolson, "Feminism and Marx," in Benhabib and Cornel, *Feminism as Critique*, 24.

42 Ibid., 25.

な立場であれば、ジェンダー、宗教、政治といった要因が市場に影響力を及ぼしていることを否定するだろうからである」<sup>43</sup>。

マルクス主義と対峙するなかでフェミニストたちが発見していく、食糧やモノの生産以外の、人間社会にとっての不可欠の諸活動がなぜ、非歴史的なもの、すなわち自然や人間以下の活動のように捉えられてしまうのか。この疑問は、多くのフェミニスト理論家を、哲学や政治思想の伝統に根強い公私二元論に対する批判へと導いていく。そして、公私二元論批判は、近代においてもっとも強固に公私二元論を維持するリベラリズム批判へとフェミニズム理論を動かしていく<sup>44</sup>。というのも、17世紀イギリスのジョン・ロックに遡ることのできる近代リベラリズムこそが、家族を政治の領域から切り離すことで、家族の領域を自然の領域とする強固な公私二元論を確立したからである<sup>45</sup>。

たとえば、先に触れたヤングも『批評としてのフェミニズム』において、第二波フェミニズム運動のスローガンである〈個人的なことは政治的である〉は、二つの原理を表明していると論じ、その原理を以下のように定義する。

- (a) いかなる社会的制度も実践も、公的な議論や表現にとって相応しい主題であることから、ア priori に排除されるべきではない。
- (b) だれであっても、あるいは個人の生のいかなる活動も局面も、私的なものへと強制されるべきではない<sup>46</sup>。

そのうえでヤングは、「今日のアメリカにおいて、ほとんどのひとは、次のようなりべラルな見解をもっているように見える」として、たとえば「ゲイである権利があるのは、かれらの活動を私的に留めている限りにおいてである」と批判する<sup>47</sup>。ヤングのこの指摘は、〈女性たちはなぜ、母親業を引き受けるのか〉とい

43 Ibid., 26.

44 Cf. Joan B. Landes, ed., *Feminism: the Public & the Private* (Oxford: Oxford University Press 1998).

45 この点については、岡野八代「規範理論における主題としての「家族」『立命館法学』333・334号（2010年）を参照。たとえば、イギリス出身のフェミニスト政治思想家であるキャロル・ペイトマンはその古典的代表作『性的契約』（1988年）において、同等で自由な市民間の契約によって市民社会が成立すると主張するロックの社会契約論は、女性が市民としての権利を放棄する婚姻契約という、文字通りの原初契約によって成立しているとして、古典的なりべラルな契約論に孕まれる〈近代的な家父長制〉を批判した。Carole Pateman, *The Sexual Contract* (Cambridge, UK: Polity Press, 1988).

46 Iris Young, "Impartiality and the Civic Public," in Benhabib and Cornel, *Feminism as Critique*, 74.

47 Ibid., 75.

う問いの解答を、家父長制に求めたハートマンから一歩進み、「男性や女性の個人的選択や意見に方向性を与えるように働く、性=情愛生産システムの構造的役割の理解」が必要であるとするフォルブルらの見解とも呼応している<sup>48</sup>。つまり、いまや問題の所在は、多くの女性が無償で引き受ける母親業から男性が剰余価値を得ていること（=家父長制の問題）というよりむしろ、女性の個人的選択なのだから、それは私的な自由であり、政治的な問題ではないとアプリアリに判断してしまう、リベラリズムにおける公私二元論にあるのだ<sup>49</sup>。

### 3. 負荷なき自己 / 自律的自己批判へ

ここまでみてきたように、第二波以降のフェミニズム理論の深化は、マルクス主義における生産パラダイムからの脱却によって、公私二元論批判、背後で公私二元論をささえるリベラリズム批判へとその射程を拡げていく。しかし、その深化の中心には、70年代には多くのフェミニストたちが *nurturance* として表現した、他者——主に子ども——への愛情や思い遣り、そして自己と他者との葛藤を孕んだ、母親業への関心があったことは、もはやいうまでもないであろう。

現代の女性運動において、その構想がいかなる内容なのかについては、一切の合意は存在していないものの、思い遣り、ケアリング、そして自己と他者、自己と自然の意味深い、非抑圧的な関係性によって特徴づけられる社会生活という最小限のユートピアをめぐる合意が存在している<sup>50</sup>。

ここにおいてようやくわたしたちは、キャロル・ギリガン『もうひとつの声』（1983年）、サラ・ルディク『母的思考』（1989年）を、これまでのように文化派フェミニズムとみなすのではなく<sup>51</sup>、むしろ、第二波フェミニズム運動から生まれてきた社会主義フェミニズムの潮流に位置づけることができる<sup>52</sup>。

48 Ferguson and Folbre, "The Unhappy Marriage of Patriarchy and Capitalism," 320. 邦訳、241頁。強調は引用者。

49 なお、リベラリズムこそが、女性たちの営み、その存在のありようの社会的価値を貶めてきたとして、フェミニストの立場から厳しくリベラリズムを批判する議論として、Wendy Brown, *States of Injury: Power and Freedom in Late Modernity* (Princeton: Princeton University Press, 1995) を見よ。

50 Benhabib and Cornell, "Introduction," 4. 強調は原文。

51 Sara Ruddick, *Maternal Thinking: Toward a Politics of Peace* (Boston: Beacon Press, 1989). なお、エヴァンスは、70年代に活躍したアドリエンス・リッチとメアリー・デイリーを「強い文化派」、80年代に登場するギリガンとルディクを「弱い文化派」と分類している。

52 ギリガンの議論を社会主義フェミニズムに位置づけようとしたものとして、岡野八代「ケアの倫理の源流へーケアか正義かの議論枠組みを疑う」『倫理学研究』44号（2014年）を見よ。

そもそもなぜ、間主観的な活動に他ならない育児が、モノの生産のように考えられてしまったのか。その背後に、あたかもひとは、誕生とともに、独立した自由意志をもった主体を前提として社会を構想する西洋リベラリズムの根深い影響力を、フェミニスト理論家たちはみいだしていくのである<sup>53</sup>。

たとえば、『批評としてのフェミニズム』の編者の一人、セイラ・ベンハビブによれば、古典的な有機的自然観から解放された近代の人間は、「孤立者としての個人」として想定しなおされた。

近代人は、自らの快樂を増すことを善きこととして自己決定の領域へ、そして、同じように善を追求する多数の者たちとの間で必然的に生じる利害の衝突を調停するルールとしての正義が政治の領域へといった具合に、善と正義、つまり私的領域の原理と公的領域の原理として分化する世界で生きようになる<sup>54</sup>。

近代思想における以上の変化にめぐって論じる際、ベンハビブが着目するのが、ケアの倫理を巡るコールバーグとギリガンの論争であった。

もはや客観的な善の基準が存在しなくなった（＝脱魔術化された）近代的な社会において、道徳的判断は、諸個人に平等に認められた権利主張の衝突をいかに調停するか、といった機能を果たすことが求められるようになる。そして、その機能を果たすのは、「平衡 equilibrium」や「反転可能性 reversibility」を含意する正義概念にはかならない。他方で、「ケアの倫理」をもう一つの倫理観として提起したギリガンとの論争をつうじてコールバーグが論じたように、「血縁関係、友情、愛、そしてセックス」といった関係は、「個人の決定」にゆだねられる善の領域なのであり、ある特定の他者との特別な関係性のなかで育まれるケアの倫理は、コールバーグにとってはあくまで善の領域に属しているのである。「血縁、愛、友情、そしてセックスからなる、わたしたちの関係性の本質に結びついた善き生をめぐる問題は、一方ではたしかに道徳領域に属する問いであるが、他方で、「道徳的」問題とは対照的な「個人的な」と名づけられる」<sup>55</sup>。近代的なブルジョア社会が展開するにつれ、「養育 nurture、再生産、愛とケアからなる、人間の活動が全体として女性の領域となり、道徳的・政治的な考察から排除される」<sup>56</sup>。

ベンハビブによれば、正義と善の分断が、徐々に公的領域と家内領域の分断へと翻訳されていく。そして、その翻訳過程における「自然」の役割に注視することで、いかに女性の役割が道徳的考察から一掃されていくか、近代的な政治思想

53 岡野『フェミニズムの政治学』、第一章。

54 Seyla Benhabib, "The Generalized and the Concrete Other," in Benhabib and Cornell, *Feminism as Critique*, 82-83.

55 Ibid., 82.

56 Ibid., 83.

が描く人間世界が、成人男性だけからなる奇妙に偏狭な世界へといかに変化していくかが、さらにはっきりするのである。

近代の社会契約論にみられる一つの特徴は、「自然状態」が市民社会の原理を特徴づける、あるいは発見するための重要な役割を果たしているということである。もちろん、ホッブズ、ロック、ルソーとそれぞれが描く「自然状態」は異なっている。しかしながら、「自然状態」が事実存在したと考えられていたのもあれ虚構であれ、自然人を想像するための思考実験の場であれ、大切なのは、つぎのメッセージだとベンハビブは言う。すなわち、「はじめに、男が一人でありき In the beginning man was alone」<sup>57</sup>。

このように、近代リベラリズムの誕生によって、公私二元論だけでなく、公私二元論によって守られる私的空間において、自らの善とは何かを知り、自由を謳歌し、自己決定権をもつとされる「自己の自律性」もが発見されていく。私的領域において、自分にとっての最善とはなにかを判断できる個人のみが主体であり——すなわち、子どもと母は主体ではない——、公的領域においては、ホッブズやロックのいうように「市民的平和や所有権を保障するために」あるいは、ルソーやカントがいうように、道徳法から合理的に導き出された〈べし〉(＝当為)にのみ主体が従うために、男性市民は市民法に統制される社会を形成するのである<sup>58</sup>。

こうしてリベラリズムが構想する自己からも社会からも、女性たちが、否、正確に言えば、間主観的で人間社会の存続に不可欠なケア労働に携わる者たちは、すっかり消去されてしまう。

## むすび 継続する第二波フェミニズム理論—ネオ・リベラリズムとの対決

フレイザーに戻ろう。『フェミニズムの運命』を締めくくる最終論文である第10章「市場化と社会的保護のあいだで」の関心は、「政治を飼いならすために、経済を利用しようとする」資本主義<sup>59</sup>、すなわち、ネオ・リベラリズムに対抗するために、フェミニズム理論がいかに解放の理論としての力を取り戻すかである。

フレイザーは、同書第9章において、第二波以降のフェミニズム理論の特徴であった、反経済主義、反男性中心主義、反国家主義、そして、近代国民国家の枠組みであるウェストファリア体制に対する態度が、ネオ・リベラリズムの時代に

57 Ibid., 84.

58 Ibid., 83.

59 Fraser, *Fortunes of Feminism*, 218.



入り、あたかも資本主義との共犯関係にあるかのように作用していると論じた。その際、着目されるのもまた、「再配分から承認へ」といったフェミニズム理論における争点の移行である<sup>60</sup>。

その議論を引き継ぎ最終章では、さらに端的に、フェミニズムと資本主義の関係が両義的なものとなっていると指摘する。たとえば、第二波以降展開された、女性が担う無償労働批判に始まる「家族賃金」批判が、〈ケア労働の市場化 vs. 社会的な保護〉か、といった、今日では出口のない議論を招いてしまったと診断される<sup>61</sup>。こうしたフレイザーの時代診断は、2013年の論考「いかにフェミニズムは、資本主義の婢となったのか——そして、いかにフェミニズムを再生させるか」でも繰り返されている<sup>62</sup>。そして、フレイザーは結論する。解放のもつ両義性を意識し、「意図せざる結果を招いてしまうという可能性を予期することで、わたしたちは、いかに最善の答えを導きだすかについて、集団的な政治的省察をなしうる」と<sup>63</sup>。現在からフェミニズムの実践と理論を振り返るとき、主流の政治と闘う——その政治に巻き込まれる——がゆえに、その意図とは反する結果を招くことは避けられない。フレイザーの主張は、確かに正しい。だが、第二波以降のフェミニズム理論は、まさにこうした矛盾ゆえに深化してきた事実もまた、忘れられてはならない経験である。

本稿で明らかにしたように、第二波が生んだフェミニズム理論は、つねに矛盾した状況のなかでその理論を深化させてきた。本稿で注目したフォルブルらの論考では、すでに、家族賃金、離婚、中絶、同性愛者の権利、婚姻間強かんの問題など、一見すると女性の権利が勝利を取めたかにみえる争点の裏で、「新しい搾取形態が発生している」ことも指摘されている<sup>64</sup>。そして、彼女たちは、公的な保育とリプロダクティブ・ライツ、ゲイ・レズビアンへの権利、新しい社会的親族関係を構築するような養育のネットワークを中心にする、文化的イデオロギーの生産、そして、相互扶助の確立といった具体的な提唱をしている。それは、ナイーブな解放への信頼というよりも、女性たちが生きる矛盾する社会のなかで、葛藤を抱えながら編み出した提言に他ならない<sup>65</sup>。

フォルブルだけでなく、ギリガンや、ルディク、ヴァージニア・ヘルドといっ

60 Ibid., 219.

61 Ibid., 239.

62 Nancy Fraser, “How Feminism Became Capitalism’s Handmaiden: and How to Reclaim it,” *The Guardian*, October 14, 2013.

63 Fraser, *Fortunes of Feminism*, 241.

64 Ferguson and Folbre, “The Unhappy Marriage of Patriarchy and Capitalism,” 327. 邦訳、248頁。

65 Ibid., 331. 邦訳、253頁。

たエヴァンスが文化派フェミニズムと呼ぶフェミニスト、その後ケアの倫理を社会構想へと大胆に導いていく、哲学者エヴァ・キティや法学者のマーサ・ファインマン、政治思想家ウェンディ・ブラウンなど、多くのフェミニスト理論家たちが、第二波が生んだフェミニズム理論の争点を引き継ぎながら、90年代以降現在に至るまで議論を継続してきた。

本稿では、第二波フェミニズムのまさに実践の波から生まれ、今現在も興隆し続けているフェミニズム理論における解放の論理を明らかにするために、主にリベラリズム批判に焦点を当てて検討を加えた。80年代に大きく開花する理論の展開があったからこそ、フェミニズム理論は、現在のわたしたちの危機——その一つが、深刻なケア不足である——を招いているネオ・リベラリズムのグローバル化のなかで、よりいっそうその真価を発揮し、わたしたちに解放の方途を示し得ているのではないだろうか。

**ABSTRACT**

## The Uninterrupted Theory of Second-Wave Feminism: Towards Resistance against Liberalism

Yayo Okano

The purpose of this article is to explore the origin of radical possibility of feminist theory originated in the movement of second-wave feminism, that is, the women's liberation in the late 1960's.

According to Nancy Fraser, who has been one of the leading scholars of American feminism since the 1980's, the history of second-wave feminism can be interpreted as a drama in three acts. Firstly, second-wave feminists shared its radical spirit with other new-left movements in the 1970's and widened the range of its theory, especially thanks to the encounter---which is often called "the unhappy marriage"--- with Marxism.

In the 1980's, however, Fraser argues that the radicalism of feminism was weakened with the shift of its focus on from promoting the economic equality to valorizing cultural differences. The result was embarrassing since free market ideology with the advent of "neoliberal" authority was enlivened by the 1980's and that neoliberalism started to attack on the egalitarian ideal of equal redistribution.

After the unproductive controversy between "the politics of redistribution" and "the politics of recognition" in the 1980's, against the social background of prevailing neoliberalism and global market, Fraser claimed that "the feminism of Act Three must join with other anti-capitalist forces."

Unlike Fraser's prescription, I revisit the original arguments, especially the feminist critique of Marxism in order to articulate where their significant contributions to flourishing the later feminist theories lay through reading carefully two edited books, *Women and Revolution: A Discussion of the Unhappy Marriage of Marxism and Feminism* (1982), and *Feminism as*

*Critique* (1987). By so doing, we find a critical understanding of Marxist notion of “reproduction” as the key concept for feminist theory. Critical reading of Marxist concept of “reproduction” urges feminists to displace “the paradigm of production.”

Feminists such as Carol Gilligan and Sara Ruddick who focus on psychoanalysis, the relations between mothers and daughters, and mothering, were usually categorized as “cultural feminists.” However, if we can situate their works within the context of “the displacement of the paradigm of production,” their arguments and other “difference feminists” come to be understood as those try to search for the empowering place or material foundations where women can undertake a social revolution outside of the labor market.

Moreover, the dichotomy between infrastructure, that is, the sphere of economy and superstructure, that is the sphere of ideology or consciousness in the traditional Marxist led feminists to criticizing the deep rooted liberal dichotomy between the public and the private in U.S.. In this awakening, feminists started to ask whether the connection between liberalism and capitalism not that between patriarchy and capitalism is the most oppressive system for women’s liberation.

The paper concludes that the radicalism of feminist theories in U.S. has been uninterrupted by the shift of their focus, whether “cultural” or “economic.” Feminist theories originated in the movement of second-wave feminism, therefore, can conceive the alternative vision as a guiding principle for struggling against the tide of neo-liberalism.